

第一編 自然環境

第一章 風土

第一節 位置・地勢

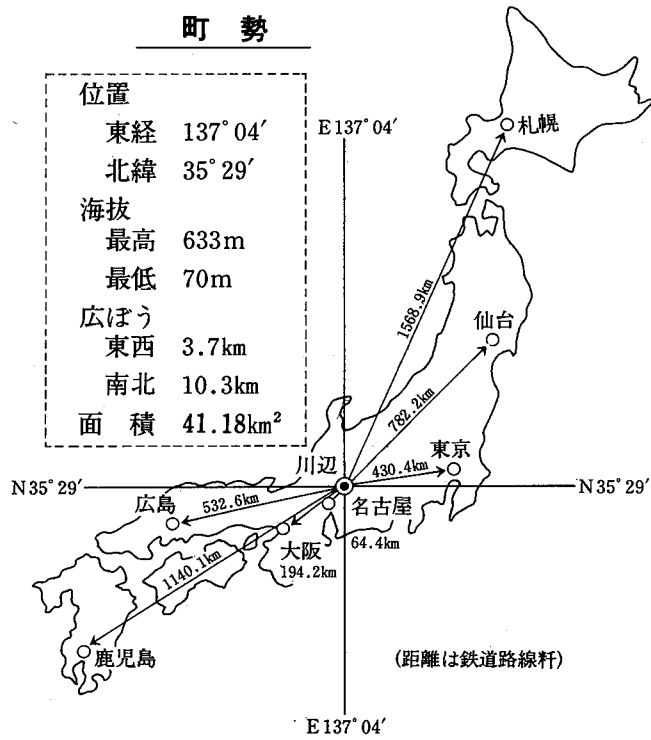
一 位置・面積

位置

川辺町は岐阜県の中央に位置し、西部は鬼飛山（二九〇・八メートル）より間見峠に至る一連の山峰で、美濃加茂市山之上および三和地区と、北部は納古山（六三三メートル）を中心とした山峰で、七宗町神淵地区と隣接する。一方東部は木和谷・大牧谷川および蛇ヶ谷で七宗町上麻生地区と接している。南部は権現山（五九八メートル）より、愛宕山（二九三メートル）にのびる山嶺で、八百津町和知地区と、飛驒川を介して美濃加茂市下米田地区との境界となっている。

町 勢

位置	
東経	137° 04'
北緯	35° 29'
海拔	
最高	633m
最低	70m
広ぼう	
東西	3.7km
南北	10.3km
面積	41.18km ²



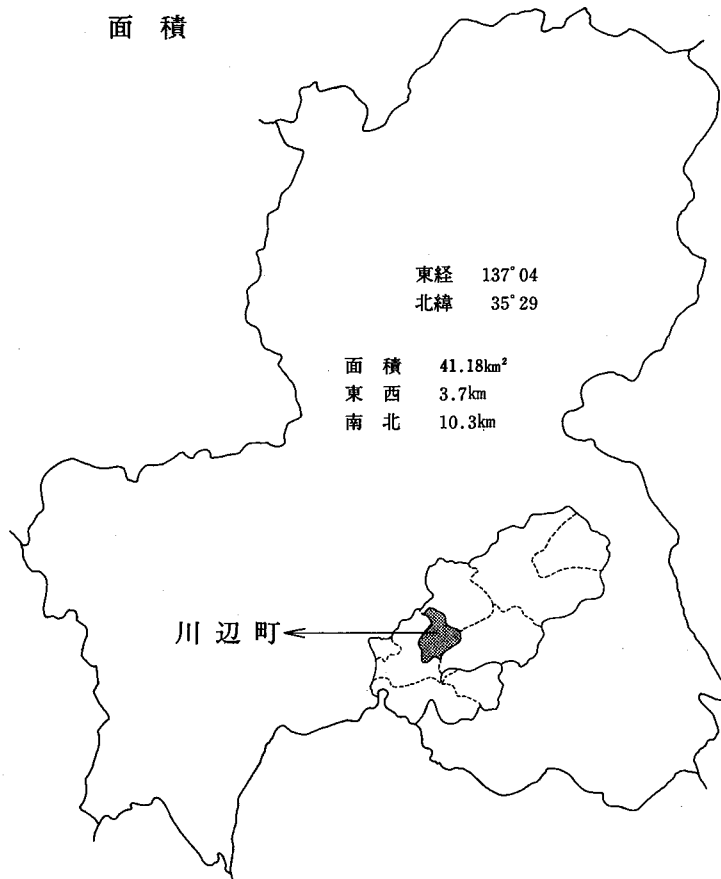
面積

川辺町は、町の中央を飛騨川が縦断する南北に長い町である。そして山林と田畑が広がる田園

地帯となっているが、総面積は次の通りである。

東西	三・七キロメートル
南北	一〇・三キロメートル
面積	四一・一八平方キロメートル

面積



海拔 最高 六三三メートル

最低 七〇メートル

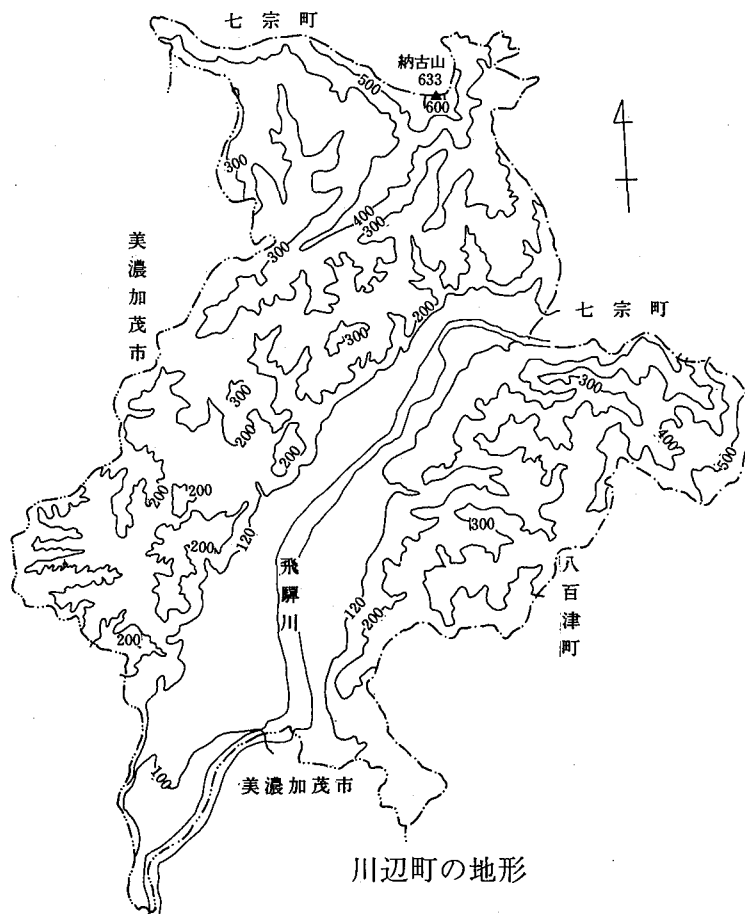
一一 地勢・地質

地勢

岐阜県の中南部、加茂郡の西南部に位置し、濃飛平野の北端にあたる川辺町は、飛驒山地との連なりの接点にあつて三方を山岳に囲まれている。地勢は一般に緩容であり、四囲に高く中央に海拔高を減じている。山岳地の傾斜は概して緩やかであるが、納古山・権現山麓の一部には、四〇〜五〇度に及ぶ急傾斜地もみられる。

町全体の三分の二を山地が占めていて、それを二分するように飛驒川が北東から南西に向つて流れている。流れに沿つて平坦な土地が川の両側に開け、下流にくにしたがつて広大になっている。平坦な土地の二分の一が田、三分の一が畑、さらに六分の一が果樹園な

第一節 位置・地勢



どになっている。

平坦な土地以外は山地となっているが、その中で七宗町との境界にある納古山は、海拔六三三メートルである。一方、町の南西には美濃加茂市山之上との境に幕引山がある。標高三〇メートルの山並みが、幕を引いた形となって長く連なっているが、この南西部は美濃加茂市から入りこんだ盆地の一部である。

飛騨川は乗鞍山麓に源を発し、下流で木曾川に合流するが、兩岸には河岸段丘が発達している。川辺町では上米田地区から木曾川に至る間がそれで、美濃加茂盆地の河岸段丘の一部と考えられている。この盆地は、飛騨川と木曾川の合流点を中心とした“ひとで”状の盆地で、全体が河岸段丘で構成されている。高位・中位・低位の段丘として三分けされているが、固結した砂礫層から成っている。

段丘は、河川の流路に沿って分布する階段状の地形で、地盤の隆起、気候の変化などによって起こる、河川の浸食作用の繰り返しの結果である。段丘はいずれも砂礫より成っているが、このうち上麻生付近では、チャートから成る岩石段丘があつて、この上に大小さまざまなポットホールと呼ばれる甌穴がある。

地質

飛騨川流域一帯の地質は、基盤をなしている古生層を、火山性の噴出物の石英斑岩や安山岩が広くおおっている。なかでも石英斑岩の領域が流域の大半を占めていて、安山岩は飛騨川源流地帯の古生層を貫いて噴出し、三〇〇メートルを越える乗鞍・御岳の二峰を築いている。古生層地帯は飛騨川下流部から馬瀬川左岸を経て、美濃地方の北方に延びるものと、木曾山脈の北方から飛騨川源流地帯に及ぶものとの二地帯がある。このほかに第四紀の洪積層や沖積層が、飛騨川沿いに帯のように細長く散在している。特に下呂町の竹原川合流点より下流部は峡谷性を示していて、地質は三つに区分される。

竹原川合流点より中山七里付近までは、両岸とも濃飛流紋岩類におおわれている。それより白川合流点の下流までは、左岸は濃飛流紋岩類、または白川口層といわれる角礫破碎岩で構成され、右岸は古生層のチャートや砂岩・粘板岩からなる地域である。さらに木曾川合流点に至る最下流部は、両岸とも古生層あるいは新生代の第三紀・第四紀の地層におおわれる地域である。

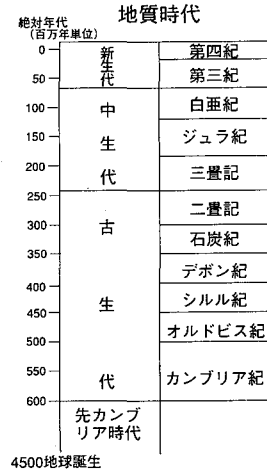
古生層とは古生代に堆積した地層で、日本列島には古生代にできた岩塊が、中生層の中に取り込まれているところが多い。約五億七〇〇万年前から二億五〇〇万年前までの時代である。新生代とは最も新しい時代で、約六五〇〇万年前から現代に至る間、哺乳類が著しく発達を遂げた時代である。洪積層は更新世に沈積して生じた地層で、台地を作って広く分布する砂礫層から成っている。沖積層は完新世に生成した最新の地層で、水を含んだ粘土・泥炭などの堆積したものである。

総体的に川辺町の地質は、北部は飛騨金山方面から続いている古生層の堅固な岩石より成り、南部は美濃加茂方面から入りこんだ、新生層の岩石から成っていると考えられている。この南部地域は、蜂屋層といわれる地質であって、美濃加茂市・富加町・可児市・八百津町にまで分布している。主に凝灰角礫岩の地層であるが、そのほか石英斑岩・粘板岩・板泥岩・砂岩より成っている。

日本列島の主要な大構造線

地質年代区分と日本列島の形成

代	年代	紀	世	日本列島の形成		造山運動	生物 () は発生		岩類の特徴	
				骨格・外形の変遷	構造地質		動物	植物		
新世代	0.015	第四紀	沖積世	沖積平野の形成	後氷河の温暖気 (間氷期)				砂れき層 シルト層 粘土層 ローム層 火山灰	安山岩 玄武岩 流紋岩
			洪積世	台地段丘の形成 日本列島大陸から分離	氷河時代 (間氷期) 間氷期→海侵→凝灰岩の噴出→カルデラの陥没		← 人類			
中世代	1.5 2.0	第三紀	鮮新世	陸化の時代 日本海溝の沈降・堆積 太平洋上の上昇(陸化)	石油の形成 グリーンターフ 造山運動				砂岩 れき岩 泥岩 頁岩	流紋岩 安山岩 玄武岩
			中新世	日本列島の原形 弧状列島構造(裂陸)の形成	(海底火山の活動活発)				グリーンターフ	(花崗) 閃緑岩
古世代	220	三畳紀	漸新世	大陸の拡大の時代					凝灰岩 および 凝灰角 れき岩	
			始新世 晩新世	太平洋側の沈降・堆積 日本海側の上昇(陸化)	石炭の形成					
中生代	135	白亜紀		日本列島の骨格の形成	領家・三波川・御荷 鈴変成岩類の形成 深成岩の貫入特に花崗岩の大バソリスの形成				砂岩・ 頁岩 粘板岩 れき岩 石灰岩 輝緑凝灰岩	花崗岩 閃緑岩 石英斑岩 輝緑岩 橄欖岩 蛇紋岩
		ジュラ紀			日高造山帯の地相斜を 除き一般に平坦な浅海または半深海性の堆積		(魚類) (哺乳類) 恐竜			
中生代	180	三畳紀						(裸子植物) (顕花植物)		
		二畳紀			飛騨片麻岩類の形成 領家・三波川・御荷 鈴など変成岩類の原岩の形成		アンモナイト		粘板岩 砂岩 チャート 石灰岩 緑凝灰岩	花崗岩 閃緑岩 石英斑岩 輝緑岩 橄欖岩 蛇紋岩
中生代	270	石炭紀		次第に陸化	地相斜性堆積		爬虫類			
		デボン紀			造山帯、沈降、 混成岩 (花崗岩類) 火山活動、陸起		(魚類) (両生類) (昆虫類)	(裸子植物) (砂・松) (いちよう)		
中生代	350	シルル紀						(種子植物) (いちょう)		
		ゴトラリア紀								
中生代	400	オルドビス紀								
		カンブリア紀								
中生代	450	先カンブリア紀			飛騨片麻岩類の原岩の形成		始生代における造山運動		片麻岩 結晶岩類	花崗岩 ? 角閃岩 ? 蛇紋岩 ?



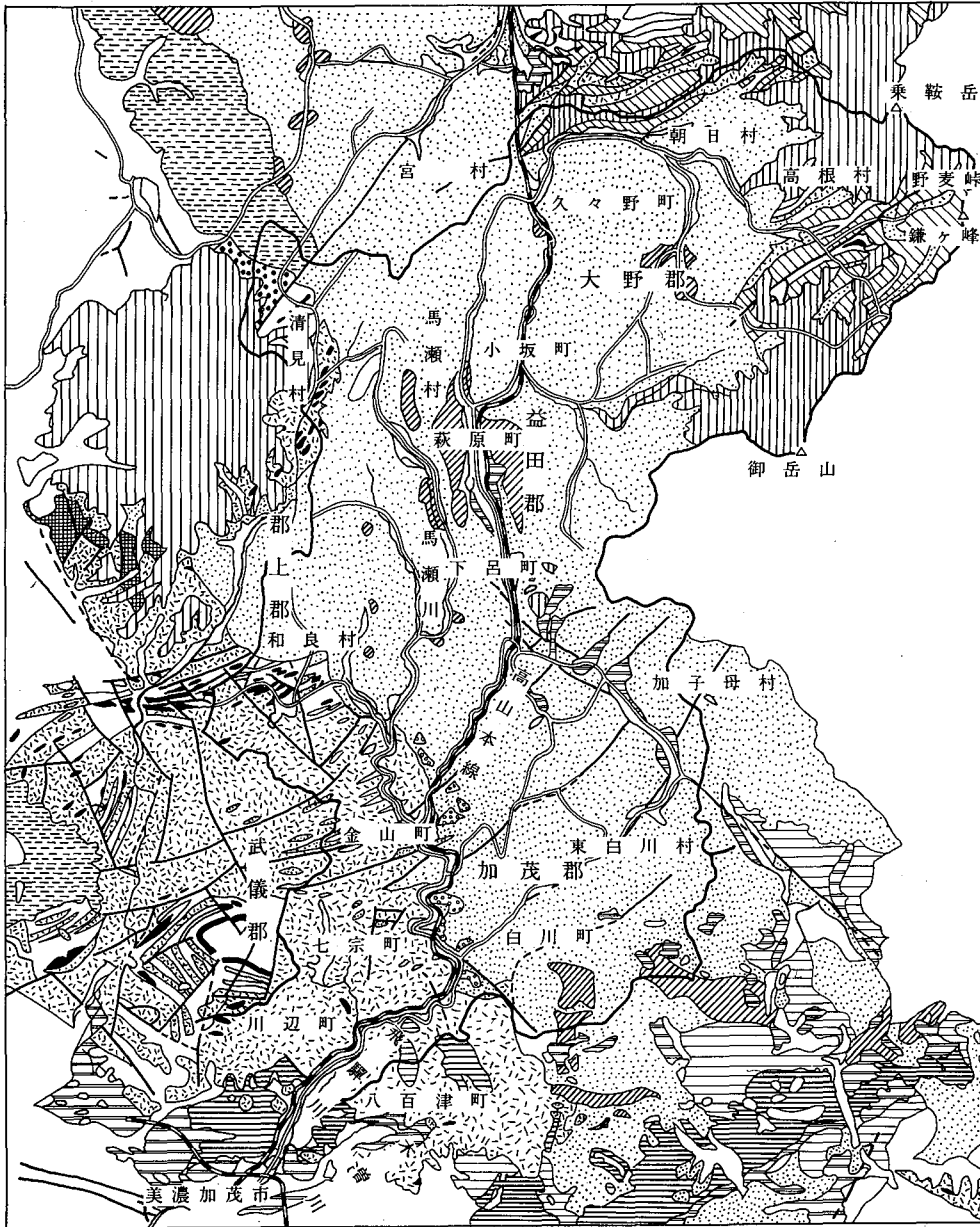
1. 飛騨外縁構造線
 2. 木武川構造線
 3. 舞鶴構造線
 4. 中央構造線
 5. みかぶ構造線
 6. 仏像構造線
 7. 光明構造線
 8. 糸魚川-静岡構造線
 9. 棚倉構造線
 10. 阿武隈東縁構造線
 11. 早池峰構造線
 12. 夕張構造線
 13. 日高構造線
- (特) 飛騨変成帯
(監) 三郡変成帯
(企) 領家変成帯
(鑑) 三波川変成帯
(傍) 秩父古生層帯
(變) 四万十中生層帯
(變) カムイコタン変成帯
(傍) 日高変成帯



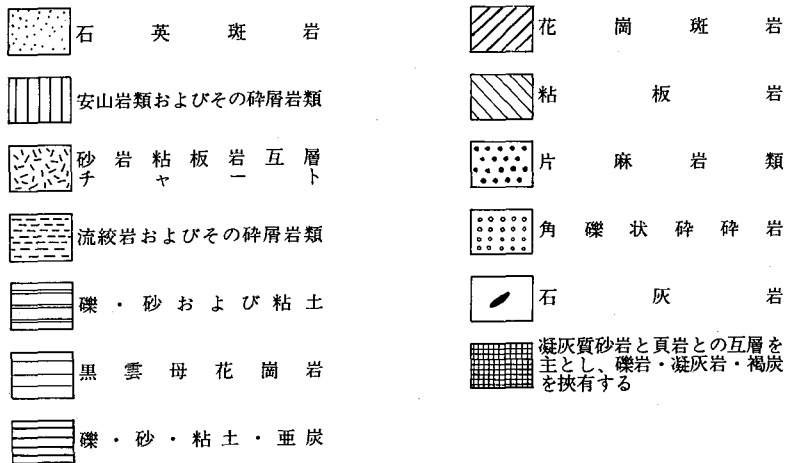
(飛騨川史による)

飛騨川流域地質図

第一節 位置・地勢



(飛騨川史による)



第二節 気 象

一 気 候

風 雲

町内の気候は中和にして冬季の降雪も少ないが、明治四五年（一九一
二）四月に設置された下麻生気象観測所の記録によると、

最多風向

南東

最多風力

和風

平均雲量

五・七二

とあり、特別に強い季節風もなく、年間を通じて風速は弱い。そして風向きも地域差があるが、全般的に南寄りの風が多くみられる。

霜 雪

周囲が山に囲まれた盆地状態の町並みであり、気温は比較的温暖の關係から初霜も遅い傾向にある。一般的には一月初旬である。そして

終霜は三月下旬であるが、四月になることもある。年間の降霜期は最近では一〇〇日前後の期間である。

初雪は一二月中旬で、終雪は三月上旬から中旬である。本格的な降雪は極め

各地点における月平均気温（℃）

地 区	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
萩 原	0.8	0.9	3.8	11.1	16.1	20.3	24.1	25.3	21.1	15.1	9.1	3.6	12.6
下 呂	0.6	1.6	5.4	13.7	15.8	20.2	24.2	25.1	21.3	15.0	8.6	3.2	12.5
金 山	1.4	2.1	5.7	11.6	16.3	20.8	25.2	26.1	22.2	15.9	9.8	5.0	13.5
下麻生	3.3	4.2	6.8	12.9	17.3	21.5	25.9	26.9	23.2	17.6	11.3	6.1	14.7
太 田	2.8	3.6	6.6	13.2	17.3	21.8	26.2	27.1	23.1	16.5	10.3	5.2	14.5
名古屋	2.9	3.6	7.1	12.7	17.5	21.5	25.7	26.6	22.7	16.5	10.9	5.6	14.4

月別平均降水量

観測地	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年雨量
萩原	84.8	87.7	155.3	211.9	203.3	325.5	380.4	285.2	342.9	212.4	125.5	105.6	2,520.5
下呂	82.4	83.5	146.9	209.9	195.9	326.1	387.1	299.9	328.4	194.1	114.1	98.0	2,466.3
金山	75.2	83.9	146.9	214.6	197.5	304.5	347.0	282.0	268.5	185.7	106.4	88.7	2,331.1
下麻生	54.7	74.3	100.5	163.3	155.5	230.3	231.9	182.8	215.0	144.9	90.2	65.1	1,709.5
太田	56.6	68.9	124.6	159.4	171.7	228.5	225.7	187.0	239.7	157.5	90.6	69.3	1,779.5

て少なく、年間を通じて六日から七日前後である。積雪が一〇センチメートルを越えることはまれである。

気温

この付近の観測点は金山・下麻生・太田にあり、そのほかにも白川流域の神土・黒川、神湊流域の中切に観測所が設置されている。昭和四〇年代の各地点における平均気温をみると、下麻生の一月の最低平均気温は三・三度で、太田の二・八度、名古屋の二・九度をいずれも上回っていることに注目される。

下麻生の八月の最高平均気温は二六・九度であり、太田の二七・一度を下回っている。そして年間平均気温も、下麻生の一四・七度に対して、太田は一四・五度、名古屋の一四・四度に比較して幾分高い数値を示している。古来より川辺は雪が少なく、過しやすい地域といわれるゆえんである。

二 降水

降雨量

飛騨川流域の各地における年平均降雨量は二〇〇〇ミリメートルで、多雨地帯は萩原・下呂地区である。一方、太田・下麻生は一八〇〇ミリメートルとなっていて、県下で最も降雨量の少ない地域に数えられている。ち

気象の概況

区分	1月					2月					3月				
	気温			平均湿度	降雨量	気温			平均湿度	降雨量	気温			平均湿度	降雨量
	平均	最高	最低			平均	最高	最低			平均	最高	最低		
	℃	℃	℃	%	mm	℃	℃	℃	%	mm	℃	℃	℃	%	mm
昭和63年	3.9	14.0	-5.0	47.1	19.0	3.1	13.0	-6.0	36.5	12.5	7.7	17.5	-2.0	43.6	133.0
平成元年	5.2	15.0	-5.0	73.2	112.5	5.5	14.0	-6.0	72.9	150.2	7.1	17.0	-4.0	60.9	105.5
平成2年	2.5	12.5	-5.5	61.3	47.0	7.0	19.5	-2.0	61.9	105.9	7.8	21.5	-3.0	52.1	79.3
平成3年	2.0	13.0	-7.0	61.7	42.0	1.7	13.0	-7.0	60.4	48.0	8.4	22.0	-3.0	56.0	128.0
平成4年	3.5	14.8	-3.0	58.9	32.5	4.4	18.6	-4.2	50.1	29.0	9.3	19.6	-2.1	70.8	118.5

区分	4月					5月					6月				
	気温			平均湿度	降雨量	気温			平均湿度	降雨量	気温			平均湿度	降雨量
	平均	最高	最低			平均	最高	最低			平均	最高	最低		
	℃	℃	℃	%	mm	℃	℃	℃	%	mm	℃	℃	℃	%	mm
昭和63年	13.4	27.0	2.0	39.7	114.0	18.2	30.5	6.0	43.9	106.5	23.0	33.0	15.0	55.1	239.6
平成元年	13.1	26.0	1.3	57.1	94.1	16.6	29.5	6.0	64.5	187.6	20.5	31.0	8.0	65.7	238.5
平成2年	12.8	26.5	1.8	54.0	175.5	19.5	28.0	6.5	58.3	156.5	23.0	36.0	13.0	61.2	178.8
平成3年	14.2	25.0	-1.0	55.2	75.5	17.4	32.0	2.0	57.0	100.0	22.5	33.0	15.0	63.4	244.2
平成4年	13.2	27.0	2.2	70.5	143.0	16.7	27.3	7.0	74.0	161.0	21.8	29.4	13.6	76.7	107.0

区分	7月					8月					9月				
	気温			平均湿度	降雨量	気温			平均湿度	降雨量	気温			平均湿度	降雨量
	平均	最高	最低			平均	最高	最低			平均	最高	最低		
	℃	℃	℃	%	mm	℃	℃	℃	%	mm	℃	℃	℃	%	mm
昭和63年	25.6	36.5	17.0	59.9	132.0	27.6	37.0	21.0	60.2	201.4	25.5	35.0	19.0	56.4	254.2
平成元年	24.2	33.0	17.0	67.9	142.0	27.1	36.0	19.0	60.4	110.5	23.4	34.0	13.0	65.7	303.5
平成2年	26.5	36.0	18.0	62.3	136.0	28.1	37.0	19.0	56.8	59.0	23.8	34.0	16.0	63.9	327.5
平成3年	-	-	-	-	216.6	24.6	34.0	18.0	60.8	102.5	22.4	35.0	12.0	59.9	279.2
平成4年	25.8	37.2	17.8	75.7	73.5	27.2	34.5	20.0	79.3	307.0	23.2	35.4	10.0	72.0	62.5

区分	10月					11月					12月				
	気温			平均湿度	降雨量	気温			平均湿度	降雨量	気温			平均湿度	降雨量
	平均	最高	最低			平均	最高	最低			平均	最高	最低		
	℃	℃	℃	%	mm	℃	℃	℃	%	mm	℃	℃	℃	%	mm
昭和63年	16.0	30.0	2.0	45.5	45.2	7.8	19.0	-3.5	43.4	30.3	3.6	14.0	-4.0	41.7	39.0
平成元年	16.1	26.0	4.5	58.3	43.5	11.2	22.5	0	63.1	47.8	4.8	18.0	-3.0	62.0	40.5
平成2年	17.3	29.0	5.0	62.7	102.5	12.1	24.5	0	64.5	152.2	5.2	19.0	-3.0	60.4	16.2
平成3年	14.6	27.0	4.0	63.0	179.4	7.9	17.8	-2.0	65.5	88.0	3.1	16.0	-3.0	65.1	42.5
平成4年	17.4	30.5	6.0	79.5	95.0	10.9	21.4	0.2	76.4	71.5	6.7	17.0	-2.2	79.8	67.0

資料 中消防署

なみに岐阜市の年降水量は二〇〇〇ミリメートルである。

月平均降雨量の最大になる月は六月が多く、太田は九月、下麻生は七月である。降雨日数も下麻生が最も少なく、太田がそれに次いでいるが、流域の最大降雨日数の地区と下麻生のそれでは六〇日の差があつて、川辺地区の降雨日が少ないことをうかがわしている。

第三節 河 川

一 大小河川

飛驒川

この流域は、日本の屋根といわれる飛驒山脈中の秀峰乗鞍岳・霊峰御岳を結ぶ稜線、これより両側に延びる山脈に囲まれた益田郡の全域と、郡上・武儀および加茂郡に渡っている。そのうち下流域の白川以降は川幅が狭まって、両岸は懸崖、流路は峡流となつて一大峡谷美を展開する。この地点から峡流は、岸壁や河床に突き出た岩盤・岩礁を種々な形に研削し、国定公園飛水峡の景勝地を形成している。そして末端付近には、天然記念物として名高い甕穴群をうがっている。

甕穴地帯を通過して約一キロメートル、上麻生発電所を左側にして流れる神湊川を合流、曲流すること四・五キロメートル、下麻生に至つてはじめて川幅を広げながら流勢を弱める。そして川辺ダム湛水池へと流入する。この付近

主 な 支 川

河 川 名	流 長	流 域 面 積	山 地 面 積
尾賀野川	4.0	2.1	2.1
飯 田 川	4.3	4.9	4.9
雄 島 川	5.6	5.1	3.6

は飛驒川の下流部で、河床は緩く川の流れも穏やかで、県営川辺漕艇場が設けられている。湛水池の長さは九キロメートルに及び、両岸に沿って耕地が開け、人家が集まっている。昭和一二年このダムの湛水のさい、二三戸の人家が移転しているが、これが飛驒川最初のダムによる移転である。

川辺ダムを越えた飛驒川は、副えん堤を経て今渡ダムに流入し、約四キロメートルにして木曾川本流との合流点に達する。野麦峠にはじまった飛驒川の流れは、実に一三八キロメートルに及ぶ行程を終え、木曾川の流れと変わって伊勢湾へ注いでいる。

飛驒川は木曾川の支流で、流域面積二一九平方キロメートルを有している。そして多くの中小河川が流入しているが、最大のものは馬瀬川で、次いで白川となっている。馬瀬川は流長六七キロメートル、流域面積四六九平方キロメートル、白川は流長五九キロメートル、流域面積二九三平方キロメートルである。これらの河川は、近年水力発電以外に工業用水にも利用され、中部圏の水資源として大きな役割を果たしている。

川辺町の主なる中小河川は次のようである。

雄鳥川 鹿塩方面より流れて、町内の中央部より西部に至る田野を流れて飛驒川に流入している。

神坂川 納古山麓より流出し、神坂口地内に出て神坂・上川辺方面より飛驒川に流入している。

水無瀬川 町内西部にあつて飛驒川に流入している。

能田川 町内中央部を流れて西柈井より飛驒川に流入している。

飯田川 権現山より和知・上飯田地内を経て、下飯田・福島地内を流れて飛驒川に流入している。

尾賀野川 比久見・下吉田地内の境を流れて飛驒川に流入している。

坂の洞川 比久見地内を流れて飛驒川に流入している。

飯谷川 下吉田地内を流れて飛驒川に流入している。

蛇ヶ谷川 上吉田・下吉田地内の境を流れて飛驒川に流入している。

牧谷川 大小牧谷川があり、上麻生地内との境界、あるいは北部山中より下麻生地内を流れて、飛驒川に流入している。

岩谷川 北部山中より下麻生地内を流れて、飛驒川に流入している。

溜池

自然に出来たものもあるが、そのほとんどは人工的なものであり、江戸・明治期に造成されている。しかし、農業用水の発達によつて機能を失いつつあり、既に埋め立てられたものもある。主なるものは次の通りである。

大谷 山楠 橋洞 別所 大洞 小金 詰 (川辺)

藤ノ木 長谷 月ヶ洞 長洞 (上米田)

寺尾下 椎木坂 小貝戸 (下麻生)

一一 災害

伊勢湾台風

昭和三四年九月二六日、一八時三〇分、和歌山県潮岬に上陸した伊勢湾台風（一五号）は、三重県から愛知・岐阜両県を北上して、富山湾から日本海へ抜けた大型台風であった。中心気圧九四五ミリバール、平均風速三二・五メートル、最大風速七〇メートル、暴風圏は半径三〇〇〜四〇〇キロメートルに及ぶ規模であった。

全国的な被害額は五〇〇〇億円で、死者は五〇〇〇人を越えたが、特に名古屋港の最高潮位は三・八九メートルとなつて、南部の水害は災害史上未曾有のものとなった。岐阜県では、死者一〇四人、被害家屋二万三戸、被害額は五〇〇億円に達したが、河川の決壊・流木・山崩れ・風倒木などによるものであった。

川辺町は、二一時から猛烈な風雨にさらされて、町内全域に大きな被害を残していった。

昭和四三年八月一七日・一八日と降り続いた雨は、記録的な集中豪雨であった。このため家屋・家財は流失し、田畑は荒涼たる川原と化し、山も随所で崩壊して道路も寸断状態となった。特に中小

河川のはんらんは土石流となつて、大きな被害をもたらしたが、川辺町では、下麻生・上川辺・鹿塩地区が最も被害の大きな地域であった。飛騨川に観光バス二台が転落し、一〇四名の犠牲者を出したのも、この集中豪雨が原因であった。

当時の気象台の記録によると、台風七号が八月一〇日に南方海上を西進し、衰弱しながら一七日には日本海北部に達した。このころ、新潟の北方海上から若狭湾を経て、北九州に達する寒冷前線が発生し、ゆつくりと南下していた。

その速度は通常の前線に比べてかなり遅く、毎時平均七キロメートルで南下した。このため岐阜県中部では、一七日二〇時から一八日にかけて激しい雷雨となった。益田郡南部・郡上郡南部・加茂郡全域など、主に飛騨川・長良川流域に激しい雨をもたらした。総雨量は富加町で三一九ミリ、萩原で二五〇ミリ、美並村で二四三ミリなどであった。集中豪雨の多い岐阜県としても、まれにみる激しい局地性の豪雨であり、気象条件や防災上の悪条件が重なったの、痛ましい災害であった。